

MAPPS story

Series Column

Why do we built this platform?

内田 剛史

早稲田システム開発株式会社
代表取締役



アプリは「ひとつ」の方がいい

ことあるたびに「自館で自由にアレンジできます」と告知し続けてきた博物館クラウド。「ポケット学芸員」は、単なる機能の一部ですが、実は母艦とはまったく逆の開発思想を採用しています。売りの「自由度」を捨ててでも実現したかったものは…？

「ポケット学芸員」の母艦となる <I.B.MUSEUM SaaS>は、「独自の管理システムを構築する予算がないミュージアムが大きな負担を感じることなく、ExcelやAccessでの不安定な管理から解放されること」を主目的に開発しました。全ユーザ館が単一のシステムを使いつつ、入り口である入力環境と出口となるWEB公開ページは自由にアレンジできることが、最大のポイントとなっています。

この自由度は館に多大なメリットをもたらしますので、弊社では「オリジナルに近い公開ページを開設できる」点を積極的にアピールしています。実際、多くのご利用館が個性的なWEBサイトを運営しておられますね。

では、「ポケット学芸員」はどうでしょう？ まったく異なる…と言うより、ほぼ正反対の思想を持っているのです。

サイトの表現は柔軟化、アプリは逆に硬直化…!?

「ポケット学芸員」には、オリジナルのページ設計機能はありません。テキストや画像、音声や動画と、発信するコンテンツの自由度はありますが、そのほかは使用アプリも画面デザインもひとつだけ、いわば硬直状態です。WEB公開機能では柔軟性をしつこく(汗)宣伝しているのに、なぜこんな仕様に？

理由は、「来館者の皆様から見た使い勝手」です。

「ポケット学芸員」は、<I.B.MUSEUM SaaS>を導入中のすべての館で使える点こそがポイントです。「どこに出かけてもまったく同じ」に固定してしまえば、操作への慣れも早く、「個人ツール」として安心してお使いいただけるはず。もちろん、館ごとに異なるアプリをインストールする必要もありません。

全国のミュージアムがひとつのアプリでガイドサービスを行

えるのは、クラウドサービスならではの特性です。別々のシステム、別々のデータベースでは、データの受け渡しの際に「共通言語」が必要となります。ルールやタイミング、方法なども全館で遵守しなければなりません、紛糾は必至。開発費もかき、ユーザ側での利用方法も複雑になるでしょう。

<I.B.MUSEUM SaaS>は、ご利用現場でどんなにアレンジを加えても、ひとつのデータベース。内部的には、最初から言語もルールが決まっているということですね。だからこそ、「ひとつのアプリでの発信」が実現できたわけです。

WEBページと館内ガイドは、コンセプトこそ同じ「情報発信」ですが、落とし込み方はまったく逆。面白いものですね。

博物館クラウド&ガイドアプリの、もうひとつの将来像

さて、この「ひとつのアプリ」という特徴は、将来像の観点から言えば、強力な武器となるかもしれません。ここで、いま弊社で展望している未来について、少しだけお話ししましょう。

<I.B.MUSEUM SaaS>のユーザ館は、すでに200館に迫ろうとしています。運用スタイルは各館固有のものがありますが、単一のシステムですので、登録されているデータは同じ書式で書かれています。

つまり、「統合がほぼ不可能に見えた博物館資料のデータが、結果として、1か所に集まっている状態」と言えるわけです。

膨大で多様なデータを瞬時に解析してさまざまな用途に活用する「ビッグデータ」という用語を最近よく耳にしますが、ユーザ館が増えるほど「博物館資料のビッグデータ」の色合いが濃くなります。「ポケット学芸員」は、博物館ビッグデータの活用を現実化する第一歩になり得る…かもしれません。